DEBUT 首長

高知県香美市長　法光院　晶一氏

人口減など課題は山積 農林業振興で活性化

ほうこういん・しょういち　1951年高知県大川村生まれ。73年専修大学経済学部卒、日本図書販売入社。翌年、高知県内にUターンし、物部村（現香美市）役場へ。福祉事務所長などを経て、2008年に総務課長。14年３月に香美市長に初当選。

高知県香美市　土佐山田町、香北町と物部村の３町村が2006年に合併して発足。高知市内から車で1時間程度で、高知空港からも近い。ユズが有力な産品で、出荷量日本一の県内でも質量ともにトップクラス。

――香美市の現状と課題をどう考えているか。

人口減少に歯止めがかからないことが最大の課題だと認識している。市の人口は合併当時に比べて2000人減り、２万7000人となっている。中でも中山間地域の物部地区は深刻で、高齢化率（65歳以上の割合）が50%を超えてしまっている。

シカの食害も深刻な状態だ。単にスギやヒノキの芽などを食べてしまうといった林業への被害だけではない。土砂の流出防止対策が必要なほど、山林の草など植物を食べ尽くしてしまっている。課題は山積している。

――地域活性化に向け、何に取り組む。

地場産業である農業と林業の振興に力を入れる。まず、農業については農協と協力して全国の市場に自ら出向くなどトップセールスを実施する。現場の担当者らと交流することで、ニーズの把握をめざす。香美市はニラやネギ、ショウガなどの産地で、中でもユズは品質の高さで知られている。農家や農協との連携を深めて品質管理を徹底することで、知名度を高めていきたい。また、高知県は地元産品を県外に販売する「地産外商」戦略を進めている。県と共同で販路を拡大し、海外での展開も視野に入れていく。

林業については追い風が吹きつつある。隣接する大豊町では2013年に四国最大級の製材所「高知おおとよ製材」が稼働した。素材を安定的に供給できれば、林業の活性化につながる。

また、県は全国に先駆けて集成材パネル「クロス・ラミネーテッド・ティンバー（CLT）」を使った工法の普及に力を入れている。３階建て以上の建物でも木材を使用できるのが特長で、従来の工法よりも需要増が期待できる。木質バイオマス発電所も来年以降に県内で稼働を始まる。無垢（むく）材になるような品質でなくても、林業資源を有効活用できるようになる。

――県が進める県外からの移住促進をどうとらえる。

人口減が進む香美市にとっては取り組むべき施策だと考えている。中山間地域に呼び込めれば効果は大きい。ただ、地域住民と移住者の間で意識にギャップがあるという話も耳にする。移住促進についてはリスクも十分に説明する必要がある。

太平洋に面しておらず、高知市から１時間程度で来られることから、住宅地として注目を浴びるようになった。今年公表された公示地価では高知県で唯一、前年比で上昇した場所があった。ただ、南海トラフの巨大地震が発生した場合、周辺の市町村は津波による深刻な影響が避けられない地域もあるため、この点を強調して移住促進につなげるようなことは考えていない。震災が発生した場合は、復旧のための基地としての役割が果たせるように準備をしていきたい。

（聞き手は
高知支局長　**古宇田　光敏**）

禁複製・無断転載